

令和 6 年度 第 1 回 八尾市総合教育会議

日時：令和 7 年 3 月 24 日（月） 午後 3 時 00 分～

場所：八尾市役所 6 階大会議室

出席者：八尾市長 大松 桂右

八尾市教育委員会

教育長	浦上 弘明
教育長職務代理者	水野 治久
教育委員	岩井 加寿子
教育委員	藤井 奈緒
教育委員	近田 直人

1. 開会

○事務局（政策企画部政策推進課）

定刻になりましたので、これより令和 6 年度 第 1 回八尾市総合教育会議を開会いたします。

はじめに、本日の配付資料ですが、次第、及び資料「令和 7 年度市政運営方針」が 1 冊となっております。

それでは、ここからは当会議の議長でございます市長に、進行をお願いいたします。よろしくをお願いいたします。

○大松市長

みなさん、こんにちは。本日は令和 6 年度の第 1 回目の総合教育会議というところで大変お忙しい中お越しいただきましてありがとうございます。約 1 時間ほどの予定時間でございまして議事進行の方も円滑にさせていただきますようお願い申し上げます。

会議を始める前でございますが、先日、今会期中の 3 月市議会定例会の冒頭におきまして、新年度に重点的に取り組むべく内容につきまして、「令和 7 年度市政運営方針」の表明をいたしました。その際の冒頭挨拶でも申し上げさせていただきましたが、昨今の社会情勢等に目を向けますと、今、自然災害のリスクの高まりや、長引く物価高は、私たちの生活に大きな影響と不安を与えております。また、市民生活に大きな影響を及ぼしている物価高騰につきまして、給付金による低所得者世帯への支援に加えて、子育て世帯への支援として、小・中学校の給食費の無償化を継続するための新年度予算案を議会へ提案いたしており、現在お諮りいただいているところであります。

また、令和7年度は、いよいよ大阪・関西万博が開催される大きな年であります。本市では、この万博を、八尾の子どもたちにとって未来への夢と希望を育む貴重な機会としたいとも考えております。その辺りについては、このあとの議事・調整事項でも触れさせていただきたいとも思っております。

さて、本題に入っていきますと、総合教育会議については、これまでも、市長部局と教育委員会が一層連携・協力して、子どもを取り巻く課題を共有しながら、誰もが安心して生活し、健やかに育っていくことができるまちづくりに向け、協議・調整を行っていく場として位置付けをしております。

今年度は1回目の開催となりますが、この間、令和6年10月には、新たに近田委員が教育委員へご就任され、本日、初めて当会議へご出席いただく形となります。近田委員におかれましては昨年度までは専門委員として、事務局席にてご出席をいただいております。今後は、会議の一員としてお迎えをいたしまして、皆様と一緒に引き続きよろしくお願いをいたします。

2. 協議・調整事項

(1) 令和7年度の重点取り組みについて

(2) 中長期を見据えた教育課題についての意見交換

○大松市長

それでは、本日は、次第にあります通り協議・調整事項として2点、「(1) 令和7年度の重点取り組みについて」、「(2) 中長期を見据えた教育課題についての意見交換」について議題として進めていきたいと考えております。

まずは、令和7年度の重点取り組みについて、私と教育長の方から、それぞれ報告・説明をさせていただきたいと思います。そののち、委員の皆様と中長期的な教育課題についての意見交換を行いたいと考えておりますので、ぜひともよろしくお願いいたします。

それでは、議題に移っていききたいと思います。「(1) 令和7年度の重点取り組みについて」であります。

こちらにつきましては、今回の総合教育会議の開催タイミングが、まさに新年度を迎える間近であるという点で、先日表明をいたしました「令和7年度の市政運営方針」について、次年度の重点取り組みをご説明させていただきたいと思い、配布資料として「市政運営方針」をご用意いたしております。

まず、はじめに私の方から、市として令和7年度に重点的に取り組む内容や、思いを説明させていただき、教育委員会関係の重点取り組みについては、後ほど浦上教育長よりご説明いた

だけだと思います。

令和7年度の重点取り組みを検討するにあたっては、市政運営方針の1ページ目に記載をいたしておりますとおり、①「2025年大阪・関西万博」②「子ども・子育て」③「安全・安心・環境」④「健康・福祉」⑤「魅力・活力」の5つを重点ポイントとして捉え、いよいよ開幕を迎える万博に関する取り組みや、近年多発する自然災害から市民のいのちや財産を守る防災・減災体制の充実といった様々な市民ニーズにも柔軟に対応するべく、行政DXの推進などの行財政改革に取り組みながら、八尾の成長、発展をめざして各種の取り組みを進めていきたいと考えております。

本日は時間の都合もありますので、私からは、とりわけ、「2025年大阪・関西万博」と「子ども・子育て」に関する中でも、特に子どもたちや教育に関する取り組みを紹介させていただきます。

まず、万博に関連する取り組みにつきましては、3ページ目から記載をいたしておりますが、特に令和7年度は、大阪・関西万博が開催される重要な年であります。市としては、この万博を、八尾の子どもたちにとって未来への夢と希望を育む貴重な機会としたいと考えています。そのため、八尾の魅力ある地域資源を世界に発信し、八尾の成長と発展につなげるべく、万博への参画・参加の各種取り組みを実施してまいります。

その中でも、市立小中学校における万博への「こども無料招待」の取り組みや「YAO iPPO」などを通して、子どもたちが世界との交流や発表を通じて、万博会場で未来社会を実際に体験し、驚きや発見を通じて将来への夢が広がるよう、大阪府等と連携した取り組みなどを進めてまいります。

次に、「子ども・子育て」に関する部分ですが、7ページ目からになります。教育に関連する取り組みをあげますと、物価高騰による子育て世帯の経済的負担軽減を図るため、小中学校の給食費の無償化を1年間延長するほか、9ページに掲載をいたしております「不登校児童生徒への支援の充実」や「非認知能力に着目した家庭教育への支援」について、掲げております。

不登校児童生徒への支援については、総合教育会議においても過去からも議題にさせていただいており、やはり、年々大きな社会課題として取り上げられるなか、不安を抱えていたり、学校に行きたい気持ちがあっても一歩を踏み出すことが難しいといった、個々の児童生徒の状況というのは一人一人違うと思いますので、個々の状況に応じた支援に向けた取り組みとして掲げております。

また、特に、近年注目をされております「非認知能力」にも着目した取り組みも進めていき

たいとして、子どもたちの知的な能力だけではなく、社会生活で必要なコミュニケーションスキルや問題解決力、自己有用感や自己肯定感、主体性、協調性などといった、将来、八尾の子どもたちが夢や希望を持ち続け、活躍してほしいとの思いも込めて市政運営方針にも掲げさせていただいております。

今日は時間の都合もありますので、抜粋する形で説明をさせていただきましたが、その他の分野についても、本格的な人口減少時代を迎える中、行政課題や市民ニーズはますます複雑化・多様化することが予想されます。また、市政運営方針には掲載しておりませんが、教育分野での課題としますと部活動の地域移行やいじめ問題対策などについても、引き続き市長部局と教育委員会事務局が連携を密にとりながら取り組みを進めていかなければならないものだと考えております。

そういったなかで、市民最優先の視点を常に持ちながら、改革と成長の好循環によって市政を進めてまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いをいたします。長くなりましたが、私からの説明は以上とさせていただきます。

それでは次に、浦上教育長の方から、教育委員会としての重点取り組みについての方向性や思い、また、その他、市政運営方針に掲載している取り組み以外での重点目標などがございましたら、あわせてご説明をお願いしたいと思っております。よろしくお願いいたします。

○浦上教育長

はい、失礼します。最初に、市長の方から大阪・関西万博のお話がありました。私も高校の時に経験していますが、すごく感動した思い出があります。今回開催されますけど、八尾の小中学生にしっかりと社会をみてもらって、自分が将来こんなことをやりたいという夢を抱いてほしい。そういう機会・チャンスになればと思って、先日、校長会も開催し、各学校の方で、まずは安全に、そして何事もなく夢が叶えられるような校外学習にしてくださいというお願いを私の方からさせてもらいました。さっそく4月から万博への校外学習の下見を開始している学校もございます。随時報告を受けて、事前指導も、帰った後の事後指導もしっかりと整理もできるようにお願いしたところでございます。

それから、今日、自宅に市政だよりが届きまして、開けたら、市政運営方針が出ていました。万博のこと、子ども・子育ての部分で、私が今から説明させてもらう3点、「小・中学校の給食費の無償化を1年間延長すること」、「不登校児童生徒への支援の充実について」、また、「非認知能力に着目した家庭教育への支援」が書かれていました。保護者がそれをみて、教育委員会はそんなことするのだなと、一目でわかる記事だと思いながら今日、朝出勤したと

ころでございます。

まずは、私の方からお話ししたいのは、この非認知能力です。私も長い間、教育に携わらせていただいていた、子どもの成長をずっと見守っていました。認知能力という数字に表す能力で人を判断してしまう部分がこの社会にはあります。しかし、もっと大事なのは、非認知能力という数字では表せない子どもの持っている様々な力、例えば、他者との関りの中で芽生える感情、何かに挑戦する気持ち、そして、自分を大切に思う心など、人間として培ってなければだめだと思います。これは教育の果たす役割だと思います。

学力をつけるのも大事、それから体力をつけるのも大事だと思いますけれども、もっとそれ以上に私は人間として持つておかないといけない力を培わしたい。これが令和7年度の八尾市教育委員会の最重要課題として取り組みを進めていきたいと考えております。

そのためには、やはり就学前の子どもの子育てをする保護者に対してしっかり働きかけをしなければならいし、今まで自分の子育てがどうであったか、見直すチャンスにしてほしいなと思っています。これから小学校や中学校にあがってくる子どもたちは、まだまだ遅くはないと思います。これから、非認知能力のノウハウをしっかりと保護者に伝えて、学校と保護者、地域を巻き込んだ形での非認知能力を高めるための取り組みを教育委員会は展開したいと考えております。

2点目は、3年前から教育長をさせてもらっていて、不登校対策を一生懸命やってきたつもりでございます。まだまだ、到達には至っていませんけれども、中学校での不登校の数が減ってきたというのは、様々な取り組みをしてきた成果だと私は思っております。

ただ、小学校の低学年は、不登校の数が増えてきている現状があり、これはどこでもそうなのですけれども、やはり小学校というハードルは高い部分はあるのかと、就学前にそういった保育といった部分がどうなのかとかいろいろなことを考えている最中ですが、できるだけ小学校の不登校の数を減らす、あるいは「学校は楽しい」といえるような、取り組みを各学校の方で展開してほしいと思っています、それを考えているところです。

3つ目は、物価高ですごく家計が苦しい状況となっています。スーパーに行っても品物の値段もあがっていて、これ程すごくあがっている、これでは各家庭生活はすごくしんどいな、こんなにあがって大変だなという思いになります。親にしたら、小中学生、給食費が無償になるというのは本当に助かる。そして、その給食費として使わなかったお金を、違う部分で子どもの教育費にあてるとか、そういうことが可能だと思います。これは、市と教育委員会が相互に連携しながら進めてきたことですが、財源を確保していただいて、この1年間無償にできるということで、すごく私どもは喜んでおることを、ここで申し上げたいと思います。

それから、先ほど市長の方から、部活動の地域移行の話がございましたけれども、令和6年度に、運動部で2クラブと文化部で1クラブのモデル事業を1年間行いました。令和7年度は、さらにその数を増やし、いろんなスポーツ分野での様々な競技、ダンスやボウリング、文化系クラブでの演劇を増やしました。子どもたちが土曜日・日曜日に自分の好きなことにチャレンジできるクラブを作ってそれを展開しようと思っていますので、展開に当たっては、八尾独自の部活動の地域移行モデルを作っていく、そしてこれから2年後3年後に定着化したいという思いを持っており、しっかり教育委員会として頑張りたいなと思っていますので、よろしくお願いいたしますと思います。

以上、市政運営方針の内容とやっていくべきことについて簡単に説明をさせていただきました。よろしくお願いいたしますと思います。

○大松市長

ありがとうございます。今、私と教育長の方から色々お話をさせていただきました。このことにつきまして、委員の皆様から、ご質問等ご意見等ございましたらお伺いをしたいと思います。また、この後の議事の中でご発言を頂いても構いませんが、今の時点で何かございますでしょうか。

○近田委員

失礼します。市長さんの方から万博の話をしていただきまして、万博については、この間の教育委員会の会議においても市として小中学校で取り組んでいくというお話がありました。

留意していただきたいことがあって、この万博の位置づけ、中身については全然問題ないしいいものだとは全然疑う余地はないのですけれども、小学校の高学年や中学生には、中身のよさと経緯であるとか、今後この万博はどうなっていくのかというようなことまでも含めて、幅広い学びになってほしいと思っています。

大人がいう、例えばイデオロギーであれがいい、これがいい、といういろんな考え方があってこの万博がこの形になったのだということ、また、今後万博はこうなっていくということについて、将来担う小中学生が自分でしっかりとこれがよかったのか、だめだったのかの判断材料になるようなところまでも含めて、きっちりと事後学習っていうものにつなげていっていただけたらありがたいなというようなことを思っております。子どもたちが行ってよかったねと思えるようにやっていただけたらと思います。事前学習も開催までの間の経緯も含めて長いスパンで我々は見つめ続けなければならないようなそれだけ大きなイベントであるということは

確かなので、そういう責任をもって教育に携わってもらって、また、行政としていろいろとアプローチしていただければというふうには思います。

○大松市長

委員の方からご意見ございました。本当にこの万博は55年ぶりにこの大阪で開催されるということで、昨日、大阪府市が担当いたします大阪ヘルスケアパビリオンの開館式がございまして私の方も行かせていただきました。行った私の感想なのですが、すごくワクワク感があって、子どもさんたちも来れば楽しいと思うでしょうし、おそらくそのパビリオンを見ようと思うと最低でも半日以上かかるじゃないかなというくらいの内容だと思っています。

今委員がおっしゃる通り、この万博をやはり体感してもらって、気づきとかまた万博に対する思いや考えというのを子どもたちにも考えてもらって、この万博の後、八尾がどう変わっていくかということも含めて非常に多岐にわたる要素があると思うので、そういったことや委員のご意見を踏まえてしっかり取り組んでいくことを教育長とも話をしております。よろしくお願いします。

○藤井委員

ありがとうございます。私の方からは重点取り組みであげていただいております、ヤングケアラーのことで私の経験をお話させていただきたいと思います。ここにもあげていただいているとおりヤングケアラーは、社会課題に直面する教育的ニーズというふうにいわれつつも、表に出てきづらいもの、子ども自身が、自分がヤングケアラーであるということを自覚できない子もいるというような状況があります。いかに周りがサポートしていくかということが非常に肝心になってきているので、今回重点的にサポートしていこうとしていると伺っていて、この問題に対する活動をしている知り合いもたくさんいることですからありがたいなと思っている次第です。

活動の中で、元ヤングケアラーの立場でもあった人たち、それは子どものころに、ヤングケアラーだった人たちが、大人になって声をあげておられて、いかにそれが苦しかったか、もしくは大人にどういう関わりをしてもらいたかったかということを、あちこちでお話されたり本を書かれたりされている人たちが私の知り合いで多くいるのですが、その中で1つ聞いた話で、私としては衝撃を受けたことがあったのでご紹介させていただきます。

ケアラーアクションネットワークという日本で最大の組織があります。活動をはじめられてもう10何年たつと思います。代表の持田 恭子さんは親しい友人なのですが、彼女が教えてく

ださったことがあります。そのヤングケアラーと呼ばれる子たちが、自分の楽しい時間が持てるための居場所づくりなんかをどんどんしてもらっている状況だけれども、持田さんがいろんなところで子どもたちにヒアリングをする中で言われることが、例えば、こども食堂というところでおうちで楽しく食事ができない子どもたちに来てもらったらという思いで運営されていると思うのですが、ヤングケアラーの子たちってこども食堂に行きたくないと思っている子が実は結構いるということです。それはなぜかという、一つは誤解もある。こども食堂というのは親にご飯をたべさせてもらってない子がいくところだというふうに思うから、ヤングケアラーの子は「うちの親はそういうわけじゃないから行きたくない」と思う子がいるという誤解がある。

あとはご飯が食べられてないとか、自分の居場所が欲しいと思っているわけではないが、ただ、学校にいて、それから家に帰って、家族のお世話をしなきゃいけない、その間にほっと一息自分の時間に戻れる、ただただなにしてこもない居場所が欲しいだけで、こども食堂と呼ばれるところでご飯を食べることが目的っていうことがあまりピンと来ていない子たちが多いなということをおっしゃっていました。

子どもの心っていうのは、周りの大人たちがこう支援したら喜ぶからということを考えていろいろ居場所を並べてみたりするのだけれども、実は違うところにあたりして、その子どもたちになかなか支援の選択肢を並べても自分から繋がっていかないことがある。おいでって誘ってもらっても行かないとかというところになっているのかなと思います。

これまでも、やっていただいていることだとは思いますが、一人一人の気持ちを丁寧に聞いて、どこかに誘い出すことが目的になるのではなく、しんどいということを自分から切り出すのを待って、信頼関係を作って話を聞くみたいなところを継続的にやっていくしかないのかなと話を聞いて思いました。

あと、ヤングケアラーっていうふうに言われている人たちは、若いときはヤングケアラーだけれども、それが終わったら、ケアラーになります。そのケアラーの支援って意外となくて、元ヤングケアラーで今となっては全然ヤングじゃないのに、自分たちが元ヤングケアラーなのだとすることで声をあげていらっしゃるのです。

子どもたち本人はなかなか自分のしんどさに気づいてなかったり、それを言語化することも難しいので、元ヤングケアラーだったという人たちが様々あちこち活動していますのでそういった当事者の声を聞いていただいても、周りの大人の方たちがどのように支援をしていけばいいのかであったりという部分で非常に参考になるのではないのかなと思った次第です。

本当にささいなことなのですが、私なんか障害の分野でよく活動していて、「きょうだい

児」という言葉を皆さんも聞かれたことがあるかもしれませんが、障がいのある子の兄弟の立場のことをいいます。

こういった子たちがヤングケアラーになりうるわけですが、その体験談としておっしゃるのが、「〇〇ちゃんのお兄ちゃん」「〇〇ちゃんの妹さん」という呼ばれ方がすごくつらかったとおっしゃっていて、呼び方ひとつでも、ちゃんと名前を呼んであげることで自己肯定感が上がったり、ひどいケースでは家族の世話をさせるために兄弟の世話をさせるために自分が産まれたのではないかというふうに思って育ったという方もいらっしゃいます。

そういった細かいところ、繊細なところまで想像しながら接することができればいいなと思っている次第です。八尾市でも重点的に取り組んでいただけるということでありがたいなと思っておりますのでよろしくお願いします。以上です。

○大松市長

ヤングケアラーについてご意見いただきました。八尾市でもヤングケアラーというのはそれぞれ効果をつかんでやってきています。ただ、まだまだつみあげていかなければいけないと感じます。こういったご意見は貴重だと思います。昔は、親とか身内の介護というのは当たり前というのはあったのですが、今はそうじゃなく、一人で抱え込んでしまったり、いろんな事情が出てくる中で我々行政がそれを気づいて、しっかり行政の横串を刺した中で、オール八尾市で進めていくというところは、ずっと根底にありますので、生の声をききながら今後各計画進めていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

他に何かありますでしょうか。

○岩井委員

ありがとうございます。私は、教育課題はたくさんありますが、八尾の学びに関わる環境づくりで大事にしたいなと思っている、「学校ＩＣＴ環境と情報活用能力の育成」について、情報提供ということになるかと思いますが、少し思いをお話させていただきたいと思っています。

未来を創る子どもたちにとって、「情報活用能力の育成」、これはＩＣＴの基本操作スキルだけでなく、情報モラルや、プログラミング、学校図書館活用スキルや学び方のスキル等も含んだものですが、そのような、体系的な情報活用能力の育成というのは言語能力や問題発見能力と並んで、生涯の「学習の基盤」となる資質能力ですので、これまでからも喫緊の課題として教育委員会も学校も力をいれて取り組んで来たと思っております。

そして、その環境としてのＩＣＴ機器なのですが、１人１台端末での学びが学校でスタート

して早5年が経ち、来年度には、1つの節目を迎え、2期計画に基づいて新しい端末に更新されます。私は、これまで1人1台端末導入のときから、学校訪問してICT機器が効果的に活用されているか授業の様子を見せていただけてきました。小学校も、中学校も、子どもたちは予想以上に端末に慣れるのが早く、端末を文房具の1つとして当たり前に使こなす子どもたちの姿と、それを指導する先生の姿があって、これまでの授業とはびっくりするほど、その様相を変えております。先生方のICT活用による授業改善が進んだことで、子どもたちの「情報活用能力」、中でも、タイピングなどの基本操作スキルは格段に向上したと思いますし、将来は「エンジニア・プログラマー」になりたいと卒業式で決意表明する子どもも小学校で出てきています。

国の調査においても、「児童生徒のICT活用を指導できる教員の割合」は、令和元年度は、58.9%であったのが、令和5年度は78.0%となり、約20ポイントもアップしたという報告を受けまして、私は正直本当によくここまで頑張っていたなと思っております。ですが、その一方で、まだ府平均には2.3ポイント、国平均には3.6ポイント、届いていないという状況もございます。

今後はさらに研修をはじめ専門家によるサポートなど、効果的できめ細かな学校への支援と指導を教育委員会としては、スピード感を持って、しっかりとやっていかなければならないと思っております。

一方、学校の方では、体系的な情報活用能力の年間指導計画を立てて、系統立てた授業づくりを推進しなければいけないのですが、この系統立てた授業実践がまだ充実していないように私は感じています。

とりわけ、この情報活用能力の項目の1つである「情報モラル」については、八尾でもインターネット等による子どもたちのトラブルが増えていますし、全国でも最近では、AIを使って読書感想文を書くというようなケースも出てきているというような話を聞きますと、より一層スピードを上げて、子どもたちの実態や発達段階に応じた、系統的な「情報モラル教育」の実践、充実に取り組まなければならないと思っております。

また、先生の中には、私と同様にICTに苦手意識があって、今更聞くのは恥ずかしいなと思っておられる方もまだいて、先生の中でも指導力の差が見られる状況があるのではないかと思っております。

今回の、端末更新をきっかけにして、学校管理職の先生方には、アセスメントをしっかりして、より一層のマネジメント力を発揮していただきたいと思っております。そして、教育委員会としては、それぞれの学校状況を把握してその実態に合った効果的な支援を、工夫して行

って格差の解消につなげていくことが大事だと考えています。その際、ICT支援員など、専門性の高い人材の確保、充実がカギになると私は思っております。

最後に、子どもたちの体系的な情報活用能力の育成というのは学校での学びが要になりますけれども、学校の間だけで育つものではないですし、技術革新による社会のデジタル化の変化は本当に加速していますので、家庭はもちろん、地域社会など互いの連携・協力はこれまで以上に重要になってきていることは言うまでもないことだと思っております。

これまでも市長をはじめ、皆様からのご支援ご協力を賜っておりますけれども、なお一層のお力添えをいただければ、ありがたいと思っております。以上です。

○大松市長

ありがとうございます。今、委員の方からご意見いただきました。この際なので、次の議事の、「（２）中長期を見据えた教育課題についての意見交換」とのところ部分も含めまして、岩井委員もその辺りのところも含めてご発言いただきましたので、この際次の項目含めて各委員ご意見等ございましたらよろしく願いいたします。

○水野委員

お世話になります。冒頭市長の方から、市政運営の重点における取り組みということで様々な力強いお言葉いただきまして本当にありがとうございます。

私としては、それプラス、中期長期的なところを見据えた教育的課題ということで３点ご提案申し上げたいと思います。

１つは先ほど、市長、教育長の方からもありました不登校の支援ということです。私は長くスクールカウンセラーとして不登校の子どもへの支援に携わってきました。不登校とひとくくりには言いまして、非常に背景が様々で、何か１つの施策や対処でことが解決するということではないというふうに思います。ただ、そこで大事なことは、子どもの声をしっかり聞いていく、先ほど藤井委員もヤングケアラーの話で言われましたとおり、子どもたちの声を聞いていくことが大事だと僕は思います。これは、社会全体の流れでいうと、例えば、この前中央教育審議会教員養成部会に大学生が参加したということがありました。教員養成大学の大学生が国の諮問機関に参加しました。例えば、精神科医療では非常にオープンに自分の症状についてお医者さんを交えて話をするということがあります。そういったやり方、つまり、当事者がいろんなところに行って、交流していくっていう方向に、社会全体がこういうふうになっていくと思います。ですからこの会議や教育委員会も市民に開かれているし、パブリックコメントがあ

るということになると思うのですが、そうすると不登校の子どもたちが、学校に行きにくいということに耳を傾けていくということが、実はすごく大切なんじゃないかと思います。

学校教育を中長期的に見ていくと、どうなっていくかということについても、子どもたちに話を伺うということも大事ななと思っています。

それから 2022 年 12 月に生徒指導提要在国から発表されました。前にもちょっと申し上げたかもしれませんが発達支持的生徒指導という考え方が言われました。発達支持ですね。子どもたちが発達するのを、例えば大人が応援するような、子どもに何かこれをやりなさい、あれをやりなさいじゃなくて、子どもたちができたことをほめていくということというのが実は生徒指導なんだということが文科省から出ました。実は埼玉県では、これ教育新聞で見たのですが、埼玉県の高校では生徒指導部というものを生徒支援部という名前に変えたという記事がありました。

つまり生徒指導というのはかなり生徒支援になりつつある。やはりこの話は不登校のお子さんの、声を聞こうということとは無関係ではないなというふうに考えています。

それからいじめ問題について、話させていただきます。先日朝、出勤をしようと思いましたが、市長をはじめ、八尾市の方々がピンクシャツをきて近鉄八尾駅におられて、ショッピングセンターの方にもその掲示があったり、画面があったりということで、大変勇気をいただきました。

八尾市では、こども総合支援センター「ほっぷ」に集約してワンストップでこども支援をしていくということで、こども・いじめ何でも相談課が配属されております。私も少しだけお手伝いさせていただいていますが、匿名アプリの相談のツールはぜひ継続をお願いしたい。やっぱりそういうところに相談窓口が 1 つあるということがすごく大事だと思います。学校の先生に聞いてもいいよ、教育委員会の窓口もあります、だけど匿名アプリの相談もありますし、

「ほっぷ」にいつでもいいです、というように相談の場所を確保することが非常に当事者を大事にするという点で大事になるのではないかと思います。

最後に、お話しさせていただきたいのは、先ほど市長の方から非認知能力という話があったのですが、こういうことを含めて子どもたちの何を高めていくかということだと考え、それぞれお話をしたいと思います。

多分、社会的な問題解決能力を高める、その何か問題・課題が解決できるというような、先ほどの万博のテーマもそうなのですが、持続可能な社会に向けて、実装して、様々な技術をそこに集約して、解決していくような方向に多分その子どもの能力を高めていかなきゃいけないというふうに思います。これ言うはやすしで、すごく難しい。本当は、子ども一人一人が

学校に入ったときに、1つのプロジェクトを与えられて、一人一人がテーマを持っていけばいいんですけど、それはなかなか難しいと思います。

そんなことをぼやっと考えていましたら1月末に教育委員会の研修会で、東京大学の池谷先生の「脳とやる気」という講演会に出る機会がありました。東大の理系の先生の脳の話かと思いましたが、最初の半分ぐらいが「楽しくやることが大切なのだ」という話がすごくたくさんでてきました。楽しくやるってということが大切なのだということは、実は私もちょっと支援を勉強させてもらっていますけれども、子どもさんに勉強しなさいと百回いうよりも大人が楽しそうに勉強しているというか、教師が楽しそうに何かやっていることを見せることがすごく大事で、それをモデリングといいます。楽しそうな雰囲気を醸し出して、それがなんか心理的安全性とか楽しい学校づくりみたいなのところにつながっていく。これは地域でもそうだと思うのです。そういう事がすごく重要だと思います。

それはすでにあって、この前、卒業式に行かせていただきました。校長先生が言うには、児童会、生徒会で話し合って校則を決めているのだとおっしゃっていて、こういうことは私が中学生のときはなかったです。なんと言いますか子ども自身が参加していて、楽しく学校で過ごすためにどういうふうにマナーを考えていくかということもすごく大事だと思います。

それから八尾の先生方についてですが、すごく前向きに一生懸命やっておられる方がたくさんおられて、そういう先生を何か勇気づけるというか褒めるというかそういったこともすごく大事だと思います。これは校長先生のリーダーシップになると思います。そういうことは実は先ほど市長が言っていた非認知能力自体がすごく大事で、なんか楽しそうだなあとか、頑張っているよねとか、そういう思いやりとか、感動したりとか、子どもの話を聞いて一緒に悲しんだりとかそういうことってというのはすごく大事で、これが非認知能力だと思います。

それから、八尾市の教育振興基本計画にも書いてありますけれども、社会性と情動の学習、情動の学習とは感情というのは学習できるのだけってということなのです。そういうことを教育プログラムに入れておこうということがもう10年ぐらい前から日本でもかなり導入されてきていて、八尾市の教育振興基本計画にもそういう話が出ていて、八尾市内の英語の先生とか国語の先生で、それぞれ一生懸命取り組んでおられる先生がおられます。私もかかわらせていただいていますけど、試験では測定できないのだけど、楽しくやりながら探求をしていくってこれが多分探究学習ということになると思うのです。そういうことを進めていただけるようお願いしたいと思います。ということで、不登校といじめの話と最後探求とか非認知能力の話をさせていただきました。

○大松市長

ありがとうございます。

○近田委員

もともと生徒指導というのは幅広く、これしちゃだめだよ、あれしちゃだめだよというせまい意味での生徒指導から、広い意味の全人教育的な生徒指導が実は昔からあります。今、おっしゃられたような情操教育的なところの部分と何をするにしても対立軸を作ってしまうので気をつけないといけない。

褒めて楽しくということはもちろんいいこと、誰もそれを否定するものではないのだけでも、その対立軸に、「お前これだめじゃないかい」「とまりなさい」「やめなさい」と言うことがどういう位置づけになっているのか。

対症療法的に危険から子どもを守っていく、非行から守っていく、いじめを防止するっていうのは実は分けて考えなくてはいけないのだけれども、その対症療法の厳しさがものすごくしんどい立場になっていることで苦しんでおられる学校の先生も現実いる。

今、だから、何かいいものを進めていくって言ったときにそこを見落とすと、現場において、全体的な規律、待っていいときと待てないとき、待てないときには、ブレーキをかけなければならない役割の先生がいる。そこが、安全安心なんていう場面には、「だめです」、「これより先へ行ってははいけません」、というようなときは大きな声も必要でしょう。

叱らなければならないときもあるでしょうというバランスをしっかりとった上で、そのことを、誰も否定はしないのですけれども、つつい世の中的には対立軸に置きがちになってしまうので、そういう幅広い八尾の教育力というものもないとダメなのかなというふうに思います。よいものと、日常の長期的な情操教育、対症療法的な叱りの部分、規律の部分というのは、両面バランスをとらないと、子どもたちの本当の意味での、トータルの安心安全が守られないっていうようなことをどこかで言っていかなければいけないと思っています。今私が言っているようなことはつつい隅っこに追いやられがちで、でも現場の先生が誰かがやっておられるっていうのは現実なので、そのことはやっぱり忘れてはならないなと思います。この辺のところあまり出てこないの、あえて、話していこうかなと私は思っております。以上です。

○大松市長

それでは、他、委員から課題というかご意見ありますか。

○藤井委員

意見というほどではないのですが、非認知能力のお話が出てきまして、つい、子どもたちの非認知能力を伸ばそう伸ばそうというふうに思いますし、大事なことなのですが、大人の私たちも非認知能力をどんどん伸ばせられるようにしていかなければならない。

自分たちは関係ないわけじゃなくて、その辺の感性が大事だと思うのです。水野委員がおっしゃったとおり、我々、大人がその姿を見せることによって子どもたちが勝手に覚えていくというか、自分で身につけていくというのがおそらく必要なんじゃないかなと思います。

私からは以上です。

○浦上教育長

今、藤井委員のおっしゃったことよくわかるのです。

長年教育に携わっていると、家庭や親に話をするとき、話しにくい部分がある。これは家庭教育の範囲だから言わないでほしい、とよくいわれました。うちの躰の話だと。そういったことがすごく多いです。そこで教育はストップしてしまう。踏み入れられない部分があります。何度親に言っても聞いてくれない、ここで終わらせてしまう。それを私自身はずっと納得ができない。だから、子どもを育てるには、むしろ親だろうと思います。学校の先生が子どもの人格形成をしっかり育んでいこうとするのですが、親がもっとわかってほしいという願いがあります。

だから、どうにかして家庭に学校が入って、先生が入って、委員会も入ってという思いがあります。これをしない限り日本の子どもの将来をものすごく私は心配していますし、不安なのです。そのあたりはどうにかしてみんな一致団結して市長部局の協力も得ながらやっていきたいと思いますので、そのような思いを今私お伝えさせてもらいました。以上でございます。

○大松市長

今、委員から多岐にわたって、ご意見が出ています。本当にそれぞれの委員さんがおっしゃっていただいていることを聞かせていただいて、そうすべきなのだなとか、そういう経験もあるのだなとすごく感じました。

岩井委員のお話で ICT の話もございました。これ全国的に進めていますけれども、それを使うことによって弊害というものがあります。我々が思う以上に子どもはこういう今の最新機器とかいわゆる SNS とかそういうところに非常に敏感で、我々が想像する以上に順応している。たまたま僕の子どもは今 5 歳ですが、決められた時間だけ触れたりするのですが、知らない間

に教えてもないのにできていて、これはすごいと思うことがあります。

そこをやっばり見据えて、SNS で色々中傷、個人攻撃などいろいろ多いと思うのですが、ここは行政だけではなかなか解決できないので、こういったところの視点もふまえて、やはり何をするべきかをというところをしっかりと目論んでいく必要があると思います。

水野先生が楽しくというキーワードをおっしゃいました。新入職員が入ってこられる、また今現在職員も働いていて、また、いろんな部局にも異動があるという時期ですけれども、私が特に激励の言葉をさせていただく時は、職員だけでなくスポーツをやっている子どもたちとかにもそうですが、楽しんでほしいというのは言葉をあえて言っています。

私らも色々な仕事をやっていくなかで、いやいやというより楽しむというふうな視点を持ってやると同じことやっていても全然違うというところの体感をしていますので、楽しくというのは非常に、とっても大きなキーワードではないかなと思っています。

先ほども、指導が支援に変わっているというそういった、文字だけでも変えることによって、子どもからすると指導員という人は怖いというイメージあるのですが、支援員というとなんか寄り添ってもらえるのかなと思うというように感じが変わります。

先ほどのこども食堂も先ほど藤井委員がおっしゃったイメージというのがあると思うのでそういうところだけではないですとする場合、名前を変えるだけでも変わっていくと思います。

今、近田委員が言っておられたとおり、我々もいくらいいいことやろうといっても結局現場が理解して動いていただかなければなりませんし、一番子どもに近いのは学校の現場の先生なので、やはり先生1人では何もかもできるというのは限界があると思いますので、組織として、対応していくのが大事だと思いました。

○近田委員

その楽しさって一体何なんだっていうところを僕は追究してほしいと思っています。皆さん楽しいから子どもが笑顔になるという。でも、水野委員と私は同じ研修を受けていてその中で、最後におっしゃられたのは、楽しいっていう笑顔だけじゃないのですよ、苦しい顔していて鬼の形相なのだけどなかでガッツポーズしている、これも楽しいですよっていうことをおっしゃいました。

昨今、安易な楽しいというところにいきがちで、楽じゃないですか。楽しさの質というものも八尾では求めていく。もちろん年齢のレベルによって楽しさって色々で、とにかくきゃあきゃあいっていればいいというときもあれば、中学生くらいの子が歯を食いしばってぐっと鬼

の形相で、汗流して、へとへとになっているけれども心の中では、「よし、やりきった」とガッツポーズをしているという楽しさというものもある。だから楽しさの規定を我々大人が勝手にしてしまうと逆にだめなのかなといつも思うのですが、そういうので勝手に対立軸がまたうまれたりということがないようにしていただけたらと思います。現場の先生方はそれがわかっておられると思います。そういうことが気になります。

○大松市長

大方一時間近くなりますので、この議題につきましてはこの辺にさせていただきたいと思います。

今後皆さんとともに、今の議論となった議題をしっかりと取り組まなければいけないと思いますし、今後も皆さんのご意見をきかせていただきながら進めていきたいと思いますので、引き続きよろしくお願ひしたいと思います。それでは、最後3、その他の部分でございますが、本日は、特に何か報告すべき事項等は聞いてございません。それでは、委員の皆様からこの際何かありましたらお願いします。

○近田委員

この会議、我々教育委員が出席するのは非常に大事なことかなと思うのですが、先ほど大学生が会議に出ておられたという話もありましたし、それこそ現場の先生方が、座っていても、いいじゃないかなと思います。そういうところの方がついつい我々もしゃべるときに、オーソリティー的なおいを出してしゃべってしまいがちになってしまうし、そうじゃないようなつたない話なんだけどもというような機会があってもいいのではないかと思います。また、この会議がで上がるまでの予備会議というようなもので、現場の先生方や親御さんとかから意見を収集しているとは思いますが、もう少しぎっくばらん、結論でなくてもいいからというような、こういう会議の質も必要なのかなというふうには、私がこの立場になる前に聞いていて思いました。

できていることでモチベーションをあげる、ソリューションにフォーカスして、できていることで、モチベーションを上げるのというのはもちろん大事なわけけれども、もうちょっと、課題に対してアプローチしても傷つかないようなそれが普通なのだよっていう空気感と、できていることばかりは言うのだけど、課題は後に置いて行かれているっていうのはちょっとどうなのだろう、という思いがあります。

そういう課題にもっと目を向けあって、積極的に我々反省して、違うじゃないか、課題に向

かっでもうちよつとこできていないじゃないかのものが会議ででない、これできています、これいいですということばかりで、もちろんその辺の認識を伸ばしていこうというのも大事だけど、これは反省材料というようなところを見つけ出していくってということも大事な会議の質ではないかなというふうに思います。

これは、あえて言っておくという話で、あげあしをとっているわけではない、前向きなことです。そこは忌憚なくしていただいていて、ありがたいなという私の思いです。

○大松市長

今後、この教育会議どうしていくかというようなご意見だと思います。おっしゃる通り、我々だけではなく、それぞれ、委員さんが経験されたこと、発言されたこと、また、いろんな各種団体さんの思いをここで発言いただいていると思います。

また、開催にあたって、いろんな議題や次は何をするというのを決めていくと思うのですが、そういった参考人のような形でそういった方に来ていただいて、一つの現場で特化してやるのも一つかなと思います。

決してこの会議が形骸化した会議ではないというところで、本当に課題解決また目指すべき方向性を決める本当に充実した会議だと、私も考えておりますので。こういったところも含めまして、ご理解いただきたいと思います。

それでは、会議はこのあたりで閉会とさせていただきたいと思います。今も言いましたけれども本当にいろんな方ご意見まだまだあると思います。しっかり皆様と議論を重ねながら八尾の子どもたちにとってどうあるべきかというところをしっかりと取り組んでいきたいと思いますので引き続きよろしくお願いいたします。本日は、お忙しい中ありがとうございました。